

詩篇 74 篇

0 アサフのマスキール

《敵による蹂躪》

- 1 神よ。なぜ、いつまでも拒み、あなたの牧場の羊に御怒りを燃やされるのですか。
- 2 どうか思い起こしてください。昔あなたが買い取られた、あなたの会衆、あなたのご自分のものである部族として贖われた民を。また、あなたがお住まいになったシオンの山を。
- 3 永遠の廢墟に、あなたの足を向けてください。敵は聖所であらゆる害を加えています。
- 4 あなたに敵対する者どもは、あなたの集会のただ中でほえたけり、おのれらの目じるしを、しるしとして掲げ、
- 5 森の中で斧を振り上げるかのようです。
- 6 そうして今や、手斧と槌で、聖所の彫り物をことごとく打ち砕き、
- 7 あなたの聖所に火を放ち、あなたの御名の住まいを、その地まで汚しました。
- 8 彼らは心の中で、「彼らを、ことごとく征服しよう」と言い、国中の神の集会所をみな、焼き払いました。
- 9 もう私たちのしるしは見られません。もはや預言者もいません。いつまでそうなのかを知っている者も、私たちの間にはいません。
- 10 神よ。いつまで、仇はそしめるのでしょうか。敵は、永久に御名を侮るのでしょうか。
- 11 なぜ、あなたは御手を、右の御手を、引っ込めておられるのですか。その手をふところから出して彼らを滅ぼし尽くしてください。

《救いの記憶》

- 12 確かに、神は、昔から私の王、地上のただ中で、救いのわざを行われる方です。
- 13 あなたは、御力をもって海を分け、海の巨獣の頭を砕かれました。
- 14 あなたは、レビヤタンの頭を打ち砕き、荒野の民のえじきとされました。
- 15 あなたは泉と谷を切り開き、絶えず流れる川をからされました。
- 16 昼はあなたのもの、夜もまたあなたのもの。あなたは月と太陽とを備えられました。
- 17 あなたは地のすべての境を定め、夏と冬とを造られました。

《御名のために》

- 18 【主】よ。どうか、心に留めてください。敵がそしり、愚かな民が御名を侮っていることを。
- 19 あなたの山鳩のいのちを獣に引き渡さないでください。あなたの悩む者たちのいのちを永久に忘れないでください。
- 20 どうか、契約に目を留めてください。地の暗い所には暴虐が横行していますから。
- 21 しいたげられる者が卑しめられて帰ることがなく、悩む者、貧しい者が御名をほめたたえますように。
- 22 神よ。立ち上がり、あなたの言い分を立ててください。愚か者が一日中あなたをそしっていることを心に留めてください。
- 23 あなたに敵対する者どもの声や、あなたに立ち向かう者どもの絶えずあげる叫びを、お忘れにならないでください。

本篇は、イスラエル民族が経験した大きな苦難が背景にあります。想定されるいくつかの出来事としては、三つほど挙げられるでしょう。

- ①ネブカデネザル二世によるエルサレム神殿破壊（前587年）
- ②ペルシャのアルタクセルクセスによるユダヤ人反乱の鎮圧（前351年）
- ③シリアのアンティオコス四世エピファネスによる神殿冒瀆（前167年）

「敵は聖所であらゆる害を加えています」（3節）、「あなたの聖所に火を放ち、あなたの御名の住まいを、その地まで汚しました」（7節）などの表現は、エルサレム神殿の聖所内に敵が侵入した様子を描いているでしょう。酷似した出来事としては、ローマのポンペイウスによっても行なわれ（前63年）、この時には三ヶ月に亘ってエルサレム神殿の区域が包囲され、祭司は皆殺しにされ、神殿の至聖所には土足で侵入されました。また、紀元70年のローマによるヘロデ神殿破壊も変わらぬ様相を呈しています。ローマ皇帝ウェスパシアヌスは、神殿やアントニウス要塞に籠って頑強に抵抗するユダヤ人を圧倒的な軍力で滅ぼし、エルサレム神殿に火をつけて陥落させました。参考までに、アンティオコス・エピファネスが行なったことも加えておきましょう。彼はユダヤ教の中心的な儀式を禁じ、トーラー（モーセ五書）のすべてのコピーを焼き払い、ギリシャ神ゼウスにいけにえをささげることを強要しました。彼の冒瀆行為の頂点をなすのが、前168年に実施された、エルサレム神殿の中にゼウスの像を据え、豚のいけにえをささげた事件でした。ユダヤ人にとって豚は汚れた生き物であり、これは決して許すことのできない行為だったのです。このように、諸外国によるイスラエル民族の支配は、常に宗教的冒瀆と虐殺を伴いました。本篇の背景には、おそらく「①ネブカデネザル二世によるバビロン捕囚」があると思われます。

1～11節において、詩人は長年拠り所としてきたエルサレム神殿が敵の手の内でいように踏みにじられている現状を神に訴えています。イスラエルの民は、獣の前になす術なく震える弱い動物の群のように描かれています（「牧場の羊」（1節）、「山鳩」（19節））。しかし、これらの言葉には常に「あなたの」が付いており、「神の民がこんなにも惨めな状態になっているのを見ごしになさるのですか！」という詩人の叫びが込められています。

この時にバビロン軍が行なった行為が様々な表現をもって具体化されています。

- ・ 「あなたの集会のただ中でほえたけり」（4節）
→かつて賛美がささげられていた場所で、敵の勝鬨の聲が挙げられている。
- ・ 「おのれらの目じるしを、しるしとして掲げ」（4節）
→異教的な象徴物、軍旗など。
- ・ 「森の中で斧を振り上げるかのよう」（5節）
→神殿の木造部分を打ち壊す様子。
- ・ 「手斧と槌で、聖所の彫り物をことごとく打ち砕き」（6節）
→彫り物を覆っていた金は剥がされ、バビロンへ持ち去られた（Ⅱ列王18:16）。
- ・ 「国中の神の集会所をみな、焼き払いました」（8節）
→ネブザルアダンによって実際に神殿に火がつけられた描写がある（Ⅱ列王25:9）。

このような凄まじい蹂躪を見て、詩人は胸を打って悲しみ、絶望の涙をもって神に訴えます。「もう私たちのしるしは見られません」（9節）とは、礼拝場所を失い、もはや祭儀を行なうことができなくなり、イスラエル人としてのアイデンティティそのものを取り去られたような思いを伝えているのでしょう。「預言者もいません」（9節）とは、神からの託宣を授かって民に伝えてきた預言者が不在となったことを言い表しています。事実、まずエゼキエルがバビロンへ連れ去られ、次いでエレミヤがエジプトへ強制移住させられました。詩人はこの状況が「いつまで」（9節、10節）続くのかと、神に問い続けます。

12～17節では雰囲気ガラッと変わり、かつて神がイスラエルをエジプトの奴隷生活から贖われた記憶が蘇ります。「海の巨獣」（13節）、「レビヤタン¹」（14節）とは、エジプトを指す比喻だと思われまふ。詩人の目の向かう方向は「昔」（12節）であり、神が天地万物を創造し、歴史全体を治め導いておられる事実を確認しています。「昼」「夜」「月」「太陽」「夏」「冬」（16-17節）を司られる神は、一時的に隆盛を誇るように見える地上の王をはるかに凌駕した方であられる。自分たちが今経験している屈辱と苦痛もまた、神の摂理の御手の中にあり、時が来ると神がご介入されるに違いない。そのような信仰を告白しています。この信仰の背後には同時に、イスラエルの民の不従順ゆえに審きが下ったという認識があるでしょう。

18～23節では再び「敵による蹂躪」という忌まわしき現実に目が向けられますが、詩人の訴え方に変化が生じてきています。ここでは神の御名が踏みにじられている現実に目を留めてくださいと、「神ご自身の問題」として呈示しているのです。神の民が嘲られるということはつまり、その民を贖われた神ご自身への嘲笑へとつながっていると。「御名を侮っている」（18節）、「あなたをそしている」（22節）、「あなたに敵対する者ども」「あなたに立ち向かう者ども」（23節）と、敵を神の御前に引き出しています。自分たちの現実を見て嘆いていた詩人の祈りは、「神を動かす祈り」へと変化しているのです。

私たちの祈りもまた、「自分のため」から「神のため」へと変えられていく必要があるでしょう。すべては御名の栄光が誉め讃えられることを目的とし、それが見えなくなってしまうことがあったとしても、必ずその最大のゴールに到達することができればと願います。

¹ レビヤタンとは、バビロニア神話の原始の海を支配していた怪物で、これらが征服されて世界創造の秩序がもたらされたとされている。